

[17_3] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :
17(3)

<https://doi.org/10.15017/17981>

出版情報 : 図書館情報. 17 (3), pp.23-38, 1981-10-25. Kyushu University Library
バージョン :
権利関係 :



九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

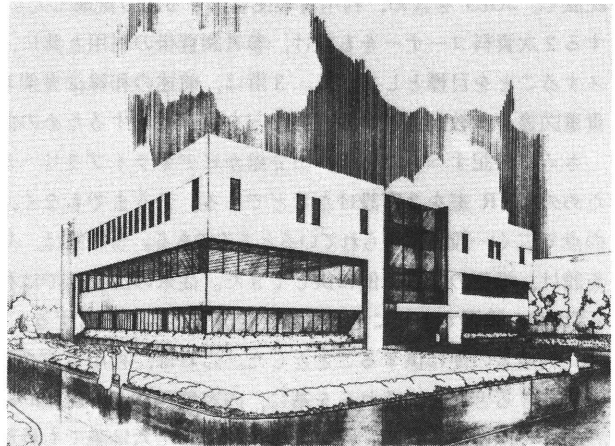
Vol. 17, No. 3 (1981, 7~9)

新しい医学分館について

山元寅男

医学分館の新営が昭和55年度概算要求として文部省で承認され、現在、その工事が着々と進められていることは、その関係者の1人として非常に喜ばしいことである。

現在まで使用してきた医学分館は、昭和31年に、医学部創立50周年記念事業の1つとして、医学部卒業生よりの寄附金で建設され、さらに、文部省予算、米国チャイナメディカルボードの寄附金などで昭和32年に完成したものである。当時、医学部では、これまで各教室にばらばらに保管されていた医学雑誌等を、他教室関係者が利用する場合の不便さや、医学情報の多様化、研究



領域の近接などから、共同利用にしようとの気運が高まり、図書の中央化が実現することになったのである。当初は、医学部中央図書館として出発し、医学部各教室保管雑誌の図書館への移転と共に、各教室の図書係を中央図書館職員に充当し、図書館の充実がはかられたのである。その後、薬学部が医学部から独立、歯学部、さらには医療短期大学の開校などにより、その規模も堅粕キャンパスにふさわしい医学分館となった。現在、医学分館の蔵書数約29万冊、雑誌約4,600種を数え、入館者も1日平均180名を越えようとしている。分館のサービス対象人員も4,300人にも達しているのが現状である。

このような状況の下で、本来、閉架式図書館の構想の下に計画され、施工された分館は、今日の開架式図書館時代には多くの点で非効率的となったことは云うまでもない。一方では、近年の学問の進歩に伴い、各学部が関与する研究分野での情報量の急増に伴い、前述のような図書、雑誌の数量的増加を来し、このために、現在の分館に見られるような閲覧面積の狭隘化を招来している。さらには、近代学習図書館としての機能の面から、現在の分館を眺めると、これも満足と云うには程遠く、学生が気楽に、落付いて利用できるには、あらゆる点で貧弱と云わねばならないし、図書閲覧室と書庫とのかね合いも不便そのものである。このようなことなどから、医学分館の整備拡充が計画され、その一つとして、現在の書庫を西の方に増築することも企画されたが、他建築物が障害となったり、また、現在の分館が閉架式時代の設計に基づくものであるために、近代図書館としての機能を十分に発揮できないという心配も重なり、ここに九大医学図書館としてふさわしいものを造ろうという新営の方向で検討を進め、これが昨年度実現できることとなったのである。

新営に当っては、その適当な場所が得られるかどうかの問題があり、堅粕キャンパスの将来構想とも関

連して場所の決定にはむずかしい面もあった。医学部、歯学部、薬学部ともこの点について話し合った結果、医学部の臨床研究棟の北側以外には場所が得られず、この場所に現在新築中である。この場所とても、医学部の大変な決断により提供されたもので、それだけに、新図書館への期待も大きいものと思われる。

新分館の建設に当っては、何よりも機能を重視しなければならない。利用し易い図書館でなければならない。次に、従来の、むしろ研究図書館的でありすぎた点を反省考慮し、学習図書館であると同時に研究図書館でもあるという2つの機能を満足させるよう配慮した。この構想を実現するために、1階を学習図書館としてのスペースに当て、十分な学生の指定図書、参考書を学生が利用し易いよう書架に並べ、広々とした閲覧室で静かに落付いて学習できるようにした。学生諸君の利用を大いに期待するものである。

次に、大学図書館のもう一つの機能である研究図書館としてもその充実を計ることにした。2階、3階をそれぞれ外国雑誌、和雑誌の閲覧室と書架とし、利用者へのサービス部門としての参考調査掛を2階に配置し、JOISを含め、利用者の便に供するよう配慮した。その他、2階には、Index medicusをはじめとする2次資料コーナーをも設け、参考調査掛の利用と共に、文献探索をより容易に、より能率的にサービスすることを目標としている。3階は、前述の和雑誌書架および閲覧室のほかに、現在医学分館保管中の貴重図書や、教室保管中の古書などを保存展示するための部屋を設け、利用者に展示することとした。

さらに特記すべきことは、当分館がビデオライブラリーとしてこれまで収集したビデオテープの利用のためのVTR室を3室設けたことである。云うまでもなく、視聴覚を利用しての教育や学習は、その効率の点で広く一般に認められているところである。当分館は、早くからこの点に留意し、ビデオライブラリーを設け、学生の学習の便に供してきた。従来の図書館では利用しにくい面もあったビデオライブラリーも、VTR室の設置で十分にその機能を発揮するものと信ずる。次に、2階および3階に、それぞれ個室を設けて、利用者の便に供することとした。これは、利用者が必要とするあらゆる文献が身近で、しかも迅速に入手できると共に、それらを基に、内容整理など、比較的時間を要するときに役立つものとする。

もう一つは、これまで医学分館を利用した人は誰でも経験あると思うが、夏の閲覧室と書庫の耐えがたい暑さの問題である。図書館の内部環境の整備として、快適な室内環境を造ることが第一である。しかし、利用者が少いときに、全館冷暖房というわけにはいかない。光熱水料は想像以上に高くつくのである。そのために、利用者の状況に従い、部分冷暖房を行い、利用者のための室内環境を快適に保つと共に、無駄な出費を削減するよう配慮した。

3階建の新医学分館が完成する日も近い。これまで述べたように、機能を重視した新図書館は、学生にとっては利用し易い学習図書館であり、研究者にとってはより機能的な研究図書館でなければならない。容れものだけが立派でも中味がよくなければ何の価値もない。図書内容、設備の充実にもさらに努力をしなければならない。それと共に、利用者のための図書館であることを忘れず、折角の新図書館であるから、図書、設備など十分活用して頂くことを願うものである。

各階の配置

各階に予定されている利用スペース及び用途は次の通りである。それぞれ平面図を参照されたい。

1 階

受付カウンター：中央ホールの右横がカウンターで、利用者はここで館内利用案内のほか登録、貸出、返却など館員によって各種のサービスをうける。

ロッカー室：正面玄関を入り、風除の左側にロッカー60人分を設けている。利用者は館内に荷物を持ち込むことができないので、ここに収納しなければならない。

一般閲覧室：中央ホールの左横が出入口になっている南東に面した明るい部屋で、学生の自習室をも兼ねている。席数は80席設ける。

ブラウジング・ルーム：南側に新聞及び軽読書のための部屋として約16席を用意する。

目録コーナー：一般閲覧室の出入口のそばに医学分館所蔵図書の目録カード（著者名別・書名別・件名別）を備える。

開架書庫：単行本30,000冊を収納し得る書庫で、一般閲覧室と隣接し利用者は自由に出入して、図書を閲覧することができるようになっている。

便所：中央ホールの奥左側に男女のトイレ、右側に身障者便所を設ける。

エレベーター：階段室の前に身障者用のエレベーターを設ける。

管理部門：玄関の右横が管理部門のスペースとなる。事務室は閲覧、目録、受入掛が入り、その他荷受、製本、印刷所、宿直室、更衣室、倉庫、機械室等が配置される。

通用口：北西側にあつて、職員及び業者専用の通用口であり、製本その他の荷受等はここを使用する。

階段室：中央ホールからの階段と、書庫内に非常用を兼ねた階段を設ける。



2 階

開架閲覧室1.2：南東に面した位置で、外国雑誌の最新版を展示する。2階閲覧室の利用者が少ない時は節電のための開架閲覧室2のみ冷暖房する計画である。座席は34席備え付ける。

開架書庫：外国雑誌専用の開架書庫で、収容冊数は約45,000冊のスペースを持っている。

保存書庫：移動式書架で収容冊数は約50,000冊が可能であり、利用度の少ない図書、雑誌等を配架する。

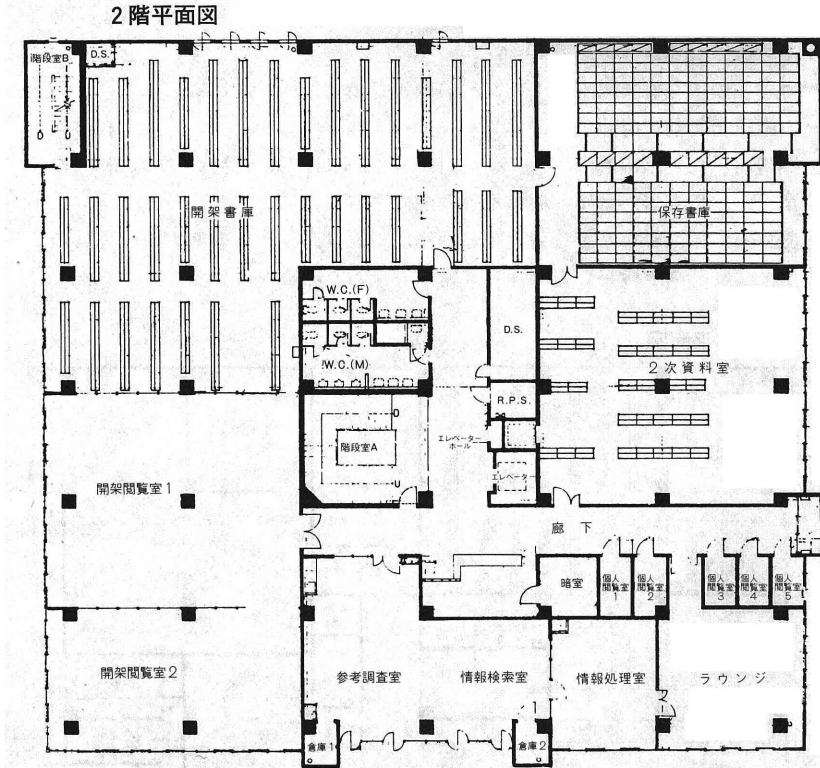
2次資料室：研究文献の検索に必要な2次資料を網羅的に収集配架する。

個人閲覧室1-5：欧文タイプライターを備え付け、研究論文を作成する場合とか、或は、地域の医学研究者が数日にわたり図書資料を利用する場合に使用する室とする。

ラウンジ：利用者の休憩場所としてゴージャスな雰囲気を備えた室を計画している。座席は16席備え付

ける。

参考調査室・情報検索室・情報処理室：研究者の質問に対応できるようJOIS等を設置し、機能的に各室を配置する。



3 階

開架閲覧室：和雑誌の最新版を展示し、座席16席を備え付ける。

開架書庫：和雑誌専用の開架書庫で、収容冊数35,000冊のスペースを持っている。

保存書庫：移動式書架で、利用度の少ない図書、雑誌を配架する。収容冊数は約90,000冊である。

VTR1-3：映写機、スライド、ビデオテープ等の視聴覚機器を備える計画である。座席は44席備え付ける。

特別閲覧室：地域の医学研究者又は貴重図書室利用者のための閲覧室とし、利用者の少ない場合は節電のためこの室のみ冷暖房する計画である。

個人閲覧室1-4：教官が図書館資料を利用するフィールド・リサーチの場として、又、出張等で地域センター館の図書資料を数日にわたり利用する閲覧者のための室として計画し、欧文タイプライターも備え付ける。

貴重図書室：医学古書、漢籍等の貴重な図書資料を配架する。約7,000冊を収納できる固定書架を備え付ける。

展示室：医学生物学関係の貴重な資料を常時展示し、又、特別なコレクション等の展観もできるように計画している。

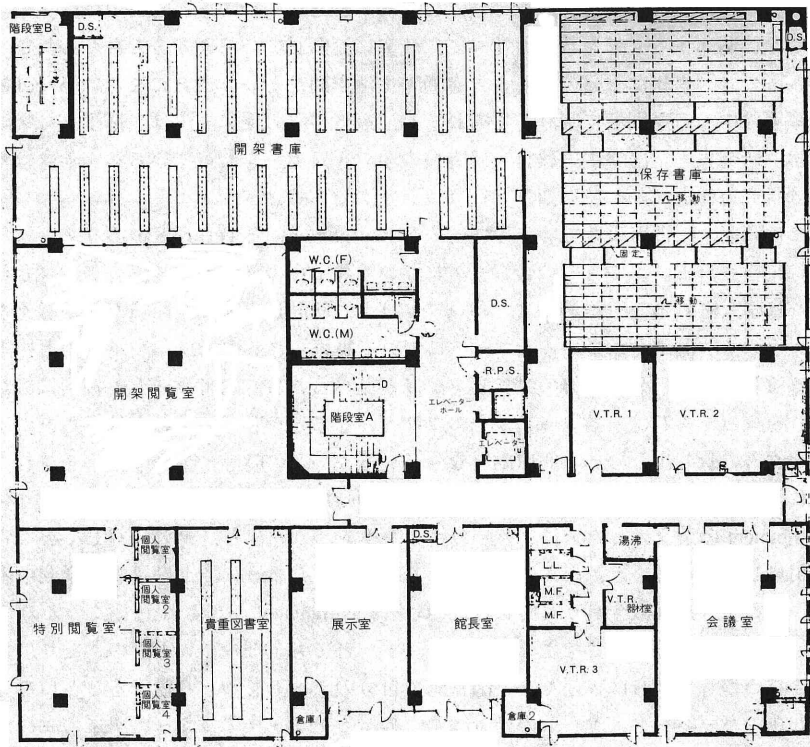
会議室：分館の運営委員会、図書委員会等医学分館に関連する会議等に使用する。座席数は30席分を備える。

LL室：カセットテープによる語学学習のための室とする。

MF室：マイクロフィッシュを読む室としてリーダープリンター等を備え付ける。

館長室：来館者のための応接室と小会議等にも使用できるよう計画している。

3階平面図



以上であるが、なお、施工段階で細部にわたっての変更ないしは修正が生ずることをご了承願いたい。

おわりに

新分館の完成はおそらく12月中旬以降と考えられる。したがって新図書館の開館は昭和57年初春頃になるのではなかろうか。その間、現分館から新分館への移転で、利用者には多大なご迷惑をおかけすることと思うが、事情ご理解の程お願いしておきたい。

(附属図書館医学分館長)

≡ 海外の図書館 ≡

ハーバード大学の図書館

小野 沢 正 喜

9月、ハーバード・ヤードでは冬の仕度をはじめたリスのかがいがいく動きまわる姿が読書に疲れた目を楽しませてくれる。この間までのサマースクールの学生たちのにぎやかな交歓風景とはうってかわって、キャンパスには秋学期の緊張した雰囲気張りつめる。夜、このハーバード・ヤードに足を踏み入れると、巨大なメープルの木々と芝生のグリーンが青白い外灯に照らし出されて、幻想的な世界が展開している。影絵のような人影が闇の中からぬっとあらわれてきては、又、薄闇の中へと吸いこまれてゆく。ものに憑かれたような目を前方に向け、肩をいからせ、本でずっしり重くなったザックを背負って行き交う人影こ

そは、図書館から図書館へ、図書館から寮へと移動している研究者、学生—ハーバードのアカデミック・コミュニティの正規の会員たちの研究三昧の姿である。ハーバードのキャンパスにある90をこえる図書館群のうち、ワイドナー図書館等の基幹図書館は、閉館時間を11時とか、2時とかにしている図書館の中で、の研究生生活を最大限に保証している。書庫の壁際に設けられた机一つの空間carrelでは、若手の研究者が自分の研究テーマに関連する文献を数十冊並べて、研究に没頭している姿がみられるが、こういう生活をしている者にとって、図書館は一日のほとんどを通す生活空間だということになる。carrelは学期のはじまる前に、応募者の中から選別して割りあてられるが、選考の際の優先順位は、博士コース院生—修士コース院生—大学院研究生—学部学生—教官・研究員の順で、研究室をもっているスタッフは差別しても、院生、学生には研究条件を保証していこうというロジックである。

学期がはじまる直前、図書館員たちは、各コースの assignment や reference のリストにのった文献を整備する仕事に忙殺される。ふつう一つのコースについて数十点の文献がリスト・アップされるが、書庫にない本は新たに購入されるし、雑誌論文、パンフレット、新聞記事の類も館員たちが様々な手だてを講じてコピーを入手する。開講されている全コースについて集められるので、学科単位でも相当な数になるが、これが、各所轄図書館の受付後方の棚にビッシリと並べられる。図書カードも特別に打たれて整理されるので、それを繰ってみれば、各コースがその学期どんなことをしているのかは見当をつけることができる。この指定図書の貸し出しは3時間以内となっているが、次の時間につかう論文を読むためには順番待ちをしなければならないこともしばしばである。ゼミの時間のほとんどはディスカッションに割かれているため、assignment の論文から自分はどのようなポイントをつかみ出し、それに対してどう考えているかということを用意していかないと、ゼミに出てもとり残されてしまうので、聴講者は学期中本と首っぴきの生活になる。各コース毎回数十頁から時には200頁位の assignment が課され、いくつかのコースをとる学生、院生は毎週数百頁の分量をこなさなければならず、とても全部を買いととのえたり、コピーしたりすることはできないから、彼らは夜遅くまで図書館で自分のノートをつくり続けることになる。

冒頭でのべた夜のハーバード・ヤードの光景はこのアカデミック・コミュニティの成員が図書館を中心に繰りひろげている生活の視覚的表現である。

ハーバードの文科系の学生と話をしていると、この大学の図書館の蔵書が900万冊をこえていて、議会図書館に次いで世界第二の規模だといって胸を張るが、年間6000ドルもの授業料を納めて勉学を続けている彼らは、立派な図書館を利用できることを、この大学に在籍するメリットの重要な部分だと考えているようである。ところで、歴史の重みを感じさせる建物におさまったハーバードの図書館群は、近代的な設備を備えた理想の図書館であるわけではない。5セント・コインを入れれば誰でも利用することのできるコピー機械は刷りあがり不鮮明で、カーボンの粉が手にざらつく代物である上、年中故障している。コンピューターは導入されていず、図書カードの検索も、貸出し事務もおそろしく前近代的な形で行われている。各図書館で購入した図書のカードは、全部が中央図書館の総合カタログの中にくみこまれていず、必要な本を求めて図書館から図書館をわたり歩かなければならないこともしばしばである。

このような能率の悪さを伴ないながらも、この大学の図書館サービスは徹底的に研究と教育に奉仕するように方向づけられている。土・日曜でも、又どんな真夜中でも必ずいくつかの図書館が開館している。勿論夜間に利用者の全くなかった図書館で館員が暇をもてあまして情景にでくわすこともある。が、いつでも図書館が開いていて、そこで仕事ができるという意識が、アカデミック・コミュニティ形成に果している貢献度ははかり知れない。

大学への登録手続きが済むと小さなプラスチックのI.D.カードを渡されるが、これをもてばハーバード大学内の全図書館は勿論、全米の主要大学の図書館への入館が可能になる。貸し出し事務もクレジット・カードの要領でこのカードをつかうことによって行われているが、学部学生専用の図書館を除けばどこも貸出冊数に制限はなく、貸出期間も指定図書を除いて一年とか一学期とかになっている。いくつかの図書

館で貸出制限冊数をたずねて、げげんな顔をされたことがある。研究をしている者に対して冊数制限などする必要がどこにあるのか？といたげな顔である。それでは複数の利用者がかち合ったらどうするのか。借出中の本は、他の利用者が請求すると図書館員から返却を求める葉書が送られてきて、すぐに返す義務が生ずる。教授が借り出している本を学部学生が請求して返却させるということもあたり前になっている。大学人であつたら誰でも対等の利用権をもっているという考え方が徹底しているから、誰が誰に対して請求してもおかしくはないし、これを図書館員が事務的に処理している。利用度の高い本を数十冊も借り出していけば、毎日のようにどこかの図書館から返却請求の葉書が舞い込むことになるが、図書館にとってこの事務量と郵送料負担は相当な額になっているはずである。

図書館内のあちこちに「正しくない位置に戻された本は紛失したのと同じになるから、一度棚からとり出した本は棚以外のところに放置するように」という趣旨の貼紙がしてあって、利用済みの本は机や窓枠の上に置き捨てにされる。これを図書館職員が、本の回収係、仕分け係、書棚への配列係と流れ作業で棚に戻している。又、本の配置順のまちがいは専門の係が常時チェックしてまわっている。

大学内の図書館で求める文献がみつからなくてもあきらめる必要はない。中央館の係に申し込めば、議会図書館や他大学図書館の在庫をチェックしてくれ、借り出しやコピーの手配をしてくれる。

上記の利用者本位のシステムを動かすのに、コンピューターやロボットはまだ導入されていない。文字通りの人海作戦でこの手間のかかるサービスが支えられている。とって図書館職員が勤務時間をオーバーして減私奉公しているという訳ではない。このサービスは大量のアルバイト学生を補助員として雇うことによって成り立っている。実は図書館内の作業のアルバイト賃金については9割近く連邦政府の補助があるそうだが、更に奨学金を得ている学生は半分の賃金で雇えることになっている。こういう条件があるとはいえ、まだ日本より賃金水準の高いアメリカで、しかも財政緊縮のすすむ中で、これだけの図書館サービスが維持されていることは、日本の大学図書館の現状を知る私には驚異しかなかった。

ここでは労働力がふんだんに投入されているというだけでなく、蔵書の扱い方がどうも日本の図書館とはちがっているようである。あれだけ人の出入りの激しい大学で、稀少本と指定図書を除けば、無制限に本の貸出を許すということ自体が、本の紛失を前提にしていることだし、部外者でも入館できるようになっているいくつかの図書館の場合、出口のところで簡単な所持品のチェックをしているだけで盗難が完全に防げるはずもない。貸出中の本の紛失も日常茶飯のようで図書館によっては、紛失本一冊あたりの罰金額をはじめから明示しているところもある。紛失しないまでも、利用→回収の過程で本はかなり乱暴に扱われている。又、各図書館にとって利用価値のなくなった本、たとえばダブって購入した本や装訂がいたんだ本は、年に1~2回行なうブック・セールで安価に放出している。ここに見られるのは、図書館は図書の保存の場ではなく、本という消耗品を原料として知的生産を行う場であるという考え方ではないかと思う。この考えに立てば、延滞した学生や研究者から罰金をとりたてることはあっても（ハーバードの場合学部学生用図書館にのみみられる）、罰として貸出停止にしてしまうということは考えつきもしないのだ。

労働力と図書を知的生産の原料として惜しみなく投入するというのはいかにもアメリカ的だが、それだけではハーバードの図書館サービスの質は語れない。その図書館群に生き生きとした生命力を持たせているのは職業意識に燃えた図書館職員たちである。彼らは配属された図書館がカバーする専門分野についての知識を持ち、文献についてよく整理された知識を身につけている。調べたい項目を告げると、関連した文献をスラスラと列挙してアドヴァイスしてくれたり、どの本がどの棚の何段目にあるかを間違いなく記憶していたりということが、ふつうに行われている。彼らの多くは図書館学で学位や資格を取って自からの職務に誇りを持っている。研究の補助労働をしているというよりも、与えられた蔵書と利用者を活用して大学の研究を組織する主役になっているのではないかという印象を与えてくれる。

上記私の目にうつったハーバードの大学図書館群のもつポジティブな側面をいくつか挙げてみたが、これは、日本の大学図書館に対して私がいだいている不満の反転像でもある。「行革」の嵐の吹き荒れる中で、無いものねだりをすることは時代錯誤のそしりをまぬかれないかもしれない。しかし、アメリカ的な

物量の投入はできなくても、今の大学内部でもやれることはあるのではないかと思う。コンピューターを導入しながら一週間の貸出期間、三冊の制限冊数、貸出停止の罰則等、図書紛失防止に方向づけられた制限が残り続けていること、他方、マイクロフィルム、テープ、雑誌等の貴重な研究資料が「消耗品」として扱われているため大学のコミュニティからは失われていっていること、etc. etc. こういう基本的な点での不都合が問題にされてもいないという現在の図書館運営の根底に横たわる問題点は、他国の大学との比較がもつ異化効果のたすけをかりながら、今後浮き彫りにされていられるべきものなのだろう。

(教養部助教授)

学内マイク

図書館体系検討委員会の発足

第118回図書館商議委員会(55.12.11開催)に議題として「学内図書館の今後の在り方について」が提出され、審議の結果、「九州大学附属図書館体系検討委員会」を設置することになった。続いて第119回商議委員会(56.4.30開催)において同委員会のメンバー構成及び検討事項等が決定した。

検討委員会の第1回会議は昭和56年7月31日、視聴覚室で開かれ、①委員会の目的等、②各委員の提出意見、③全学的立場よりの図書館(室)の現状と問題点、④学内部局図書室の現状と問題点について、それぞれ説明・審議され、③及び④の「現状と問題点」は継続審議となった。

本委員会の目的は次の通りである。

大学図書館の使命は、大学が必要とする図書館資料及び学術文献に関する情報を、ひろく収集・処理・蓄積し、その利用サービスにつとめ、研究者にとっては主として研究と調査、学生にとっては学習と教養の重要な場としての役割を果たすべきものとされている。

しかし、近年における学術研究の急速な進展に伴い、研究活動の結果として生産される学術情報量は急激に増大し、学術に関する文献情報等は、その範囲・内容・利用の態様なども多様化しつつある。このような状況下で、学術情報の円滑な流通を図るためには、国際的にも、国内的にも適切な施策が講じられなければならない。

文部省はこの学術情報流通体制の整備充実に関して、「学術情報センター」を設置し、国立大学共同利用機関・大学図書館等をネットワーク化する「学術情報システム」の構想を打ち出し、このシステムの中で大学図書館の新たな発展方策を推進するよう要請している。

本学附属図書館(現中央図書館)は、その歴史をみるに、明治42年に開館されたのを端緒とする。爾来70余年の間に、大学の進展に伴い、本学図書館組織も順次拡大整備されてきた。この間、各々の図書館組織毎に独自の運営(各部局毎に集中、或いは分散方式等)がなされてきた。昭和30年代終わりから40年代始めにかけて「九州大学図書館体系マスタープラン」が検討され、昭和47年に中央図書館が新築された。現在中央図書館・医学、教養部両分館・部局図書室が相互に協力しつつ図書館活動を行っている。

しかし、現状は多くの問題点をかかえ、また、前述のような新たな状況に対応するには極めて不十分であると思われる。このため本学図書館組織を改めて見直し、近代化路線を打ち出すべき時期に到達していると考えられる。このことによって、文部省の示す「学術情報システム」への対応も可能となってくるであろう。当然、大型計算機センター・情報処理教育センター等との関係を図る必要もあると思われる。

本委員会は、本学図書館組織の近代化路線を探り、そのための改善整備充実すべき事項を整理し、全学的支援態勢のもとにその実現に邁進すべく、具体的方策を検討することをもって目的とする。

第2回会議は昭和56年8月31日に開かれた。各委員から追加意見の提出、補足説明が行われ、継続議題が審議されたほか、図書館業務電算化について事務部長から説明があった。

第3回会議は11月上旬に開かれる予定である。前2回の会議で検討された現状と問題点をふまえて今後の整備充実策が審議される。

検討委員会は今後、2カ月ごとに開かれ、57年3月には中間的整備充実案の作成を行い、57年7月頃までに集約・最終的整備充実策を作成する計画になっている。

図書館体系検討委員名簿 (56.7.31 現在)

委員長	館長	塚原博					
委員 (文)	教授	森洋	委員 (歯)	教授	青野正男		
〃 (育)	〃	前田重治	〃 (薬)	〃	川崎敏男		
〃 (法)	〃	林迪廣	〃 (工)	〃	入江富士男		
〃 (経)	〃	津守常弘	〃 (農)	〃	平嶋義宏		
〃 (理)	〃	勘米良亀齡	〃 (養)	〃	中村正夫		
〃 (医)	〃	山元寅男	〃 (総理工)	〃	赤崎正則		

図書館業務電算化ニュース

情報管理掛の新設

図書館業務電算化の進展に伴い、昭和56年4月1日付で閲覧課にシステムの維持・管理に関する業務を担当する情報管理掛が新設された。

主な業務は次に掲げるとおりである。

1. システムの運用計画に関すること。
2. システムの保守・管理に関すること。
3. ファイル及びプログラム等の維持・管理に関すること。
4. システムの開発に関すること。
5. ネットワークにおける共同処理及びその連絡調整に関すること。
6. システムの利用に係る知識及び技術の普及に関すること。

当面は初期計画のシステム開発に重点を置いているが、今後更に環境を整備しシステムを充実させて行く予定である。

業務電算化のための打合せ会議

〈とき：昭和56年9月18日(金) ところ：中央図書館小会議室〉

このたび九州大学附属図書館が中心となって開発を進めている「図書館業務電算化計画」のうち北部九州地区ネットワークの構成館である九州工業大学附属図書館にNECシステム100/85の設置が予算化された。これは昭和57年1月に、稼動する予定である。

このため標記の打合せ会議を持ち、本館と九州工業大学附属図書館がそれぞれセンター館と端末館としてより効率的な実施のための意見調整を行った。(情報管理掛)

利用の窓

図書館サービスの改善 — 共通閲覧証 —

教職員や大学院学生が他の国立大学の図書館に出向いてその所蔵資料を閲覧したい場合、これまでその都度一館ごとに附属図書館長から依頼書の交付をうけ、これを相手館に提示する必要があった。それが今後は「国立大学図書館間共通閲覧証」を相手館に提示することにより閲覧できるように改善される。この共通閲覧証は申請により交付され、当該年度中、有効である。

現在、参加図書館の全部について学外利用者に対する注意事項等のマニュアルの作成や共通閲覧証の印刷の準備が進められている。マニュアルの完成等、準備が整い次第、「国立大学図書館間共通閲覧システム」が機能する予定である。なおこれは昭和56.6.23第28回国立大学図書館協議会総会において決定されたものである。

貴重図書・特殊図書利用暫定要項の制定

中央図書館は貴重図書等の管理・運用の万全を期すため次の要項を制定した。

九州大学附属図書館中央図書館貴重図書・特殊図書利用暫定要項

1 趣 旨

この要項は、九州大学附属図書館運営規則（昭和48年8月1日施行。以下「運営規則」という。）及び、九州大学附属図書館中央図書館利用規程（昭和48年9月3日施行。以下「利用規程」という。）に定めるもののほか、中央図書館所蔵の貴重図書・特殊図書（以下「貴重図書等」という。）の利用に関し、必要な事項を定める。

2 閲 覧

- イ 利用規程第7条に規定する所定の願書は、別記様式1の貴重図書等閲覧許可願書とする。
- ロ 貴重図書等の閲覧は、九州大学附属図書館中央図書館特別閲覧室利用要項（昭和48年9月3日実施）の定めるところにより特別閲覧室で行うものとする。

3 帯 出

運営規則第6条のただし書により、貴重図書等の帯出許可を受けようとする者は、別記様式2の貴重図書等帯出許可願書をあらかじめ館長に提出し、許可を得なければならない。

4 複 写

貴重図書等は、複写することができない。ただし、特別の場合であって、館長が特に必要と認めるときは、この限りでない。この場合、複写の許可を受けようとする者は、別記様式3の貴重図書等複写許可願書をあらかじめ館長に提出し、許可を得なければならない。

5 実 施

この要項は、昭和56年6月1日から実施する。

本学教官著作寄贈図書

＜中央図書館＞

高濱 靖英（歯学部教授）

米国歯学教育 高濱靖英・清水賢二訳
医歯薬出版 昭56

根本 道也（教養部助教授）

東ドイツの新語
同学社 昭56

彦坂 照（工学部助教授）

詳解 構造力学演習 彦坂照・崎山毅・
大塚久哲共著
共立出版 昭56

＜医学分館＞

高濱 靖英

米国歯学教育
医歯薬出版 昭56

井口 潔（医学部教授）

血管外科に必要な血管露出法と局所解剖
草場昭著 井口潔監修
へるす出版 昭56

青野 正男（歯学部教授）

シュルレーガー最新歯周治療学 Saul Schluger,
R.A. Yuodelis, Roy C. Page共著 青野正男監訳
医歯薬出版 昭56

＜教養部分館＞

大塚 久哲（工学部助教授）

詳解 構造力学演習 彦坂照・崎山毅・
大塚久哲共著
共立出版 昭56

海老井 英次（教養部助教授）

芥川龍之介 海老井英次編（鑑賞日本現代文
学第11巻） 角川書店 昭56

「JOIS」の利用状況について

— 中央図書館 —

中央図書館参考調査掛(内線2454, 2464)では本年4月から「JOIS」による文献検索サービスを開始しています。4月から9月までの利用状況は次表の通りです。

なお、検索の手助けとして「JOIS利用ガイド」を作成し各部局図書掛等へ配付しておりますのでご利用ください。

注)「JOIS」については本誌第17巻1号(昭和56年1～3月)をもあわせてご覧下さい。

JOIS 利用状況調べ (昭和56年4～9月)

月	JICST				CASEARCH				MEDLINE (TOXLINEを含む)				合計			
	件数	OFF 件数	時間	料 金	件数	OFF 件数	時間	料 金	件数	OFF 件数	時間	料 金	件数	OFF 件数	時間	料 金
4	10	303	52	16,571	6	819	45	55,846	6	—	45	9,450	22	1,122	142	81,867
5	14	838	140	48,882	6	178	107	44,211	4	—	46	10,570	24	1,016	293	103,663
6	7	291	86	26,007	6	601	78	55,955	—	—	—	—	13	892	164	81,962
7	6	236	28	10,892	4	—	57	18,639	1	—	4	840	11	236	89	30,371
8	6	9	43	9,845	5	1,238	59	81,455	3	135	69	17,410	14	1,382	171	108,710
9	6	566	24	18,480	5	41	45	17,224	1	42	—*	3,100	12	649	69	38,804
計	49	2,243	373	130,677	32	2,877	391	273,330	15	177	164	41,370	96	5,297	928	445,377

* SDIによる出力のみ

「JOIS」のサービスデータベースが追加

データベース名	収録期間	サービス開始日	サービス日	料 金	オフライン料金※	ファイル番号
JICST国内医学 文献ファイル	1980.4～	56.10.5	月～金	210円/分	A：35円/件 F：17円/件	050
BIOSIS生物学 文献ファイル	1979.1～	56.11.2(予定)	月・水・金	287円/分	F：17円/件	320
CAB農学文献 ファイル	1979.1～	56.11.5(予定)	火・木	210円/分	A：35円/件 F：17円/件	330
MED7475医学 文献ファイル	1974.1～ 1975.12	56.11.2(予定)	月～金	210円/分	A：35円/件 F：17円/件	111

* オフライン申込1回につき手数料500円が加算されます。

◆ 研 修

「オンライン時代に対処した情報活動」

(第14回ドクメンテーション夏季特別セミナー)

花 田 洋 子

<とき：昭和56年7月16日(木)～18日(土) ところ：筑波研修センター>

「最近のオンライン情報検索の発展はめざましいものがあり、直接オンラインを利用すると否にかかわらず、情報活動はオンラインの影響を強く受けざるを得ない。オンラインをいかに有効に利用すべきかは、現在および将来の大きな課題であると同時に情報活動はオンラインですべてがなされるわけではなく、マニュアル調査、資料整備なども情報活動の変らざる基本といえよう。このオンライン時代に対処して、われわれがいかに情報活動を展開していったらよいかということに焦点をあてて討論をすすめていきたい」として開催された標記セミナーに参加した。

セミナーは現在何らかの形で情報活動にたずさわっている人達約50名が、基調講演のあと3つの分科会にわかれ2日間にわたって行われた。分科会のA：オンライン情報検索の利用戦略 B：オンライン時代

の図書館・資料室 C：マニュアル検索と機械検索 の3つのテーマのうちB分科会を選び参加した。

B分科会では参加者がおかれている現状と抱えている問題点等について特に情報活動のオンライン化に焦点を合わせて意見が述べられた。その中では企業内資料室において、社内発生情報に対し独自のオンライン検索システムを持っているがハード部門の急速な進歩に伴い新しいソフトの開発に迫られていることや、資料の整理にIndex Medicusを参考にして自家製のソーラスを作成する計画等々や増え続ける資料と収容量の限界の間であって資料のマイクロ化、目録のオンライン化（既存の目録は凍結）を部分的にはあるが実施している例も報告された。目録のオンライン化は筑波大学のTULIPSでも取り込まれており大学図書館業務の電算化の流れの中であって今まで手をつけられなかった目録情報のデータベース化がMARCの普及や「学術情報センター構想」と相俟って大きく取り込まれようとしている感じがした。

所謂大型データベースによる文献検索とその原報及至所在情報の提供は車の両輪の如くあって欲しいと思うが国内に限って言えばそれはまだまだである。「学術情報センター構想」においても目録・所在情報の形成・提供には最低3年はかかるとされており、本学の既に稼働を開始したシステムで学内の所在情報を得られる日もまだまだ遠い。今後、図書館業務の電算化はトータルシステムを志向し、特に目録部門が所在情報として全国レベルで機能するよう設計されて行くと考えられるが、OCLCやUTLAS等におけるオンライン目録への計画や実施は我が国の大学図書館の目録業務を根本から洗い直す契機となるのではなからうか。

A、C分科会では同じデータベースであってもシステムが違くと結果も違うので一つのシステムに執着しないで複数のシステムを有効に利用することも検索のための一つの手段であること、データベースの増加や複数システムの利用は検索担当者に専門的な知識や高い能力を要求するので積極的な研修を必要とすること、検索の過程の再利用(検索プロファイルの登録や個人ファイルの作成等)を検討すること等々オンライン検索の技術的な面からの討議が主に行われた様である。

以上、大変簡単な報告であるが当日は各分科会とも熱心な討論が行われ、最終日の各分科会の報告をまじえての全員参加のミーティングでもオンライン検索に取り組む参加者の熱気が強く感じられ、その熱気に未だに煽られている状態である。

(閲覧課参考調査掛長)

大学図書館職員長期研修(第13回)

舟 越 俊 允

<とき：昭和56年8月6日(木)～26日(水) ところ：図書館情報大学ほか>

今回の研修は「学術情報システムと大学図書館」のテーマの下に人文・社会科学系20名、自然科学系20名が参加し、図書館情報大学を主な会場として行われた。

学術情報システムについて

今日の研究者は急増する学術情報の中であってその動向を迅速かつ適確に把握し、一方では自己の研究成果をいちやく情報化して広く流通させなければならない。北米や西欧では既に情報流通サービスは組織化され、わが国でも国際通信網等によりそのサービスを利用できるようになったが国内における学術情報の流通体制は未だ不十分であり、研究者の要望に十分に答えることはできていない。

所謂「学術情報システム」は学術情報センターを中心として大型計算機センター、共同利用研究機関や大学図書館等がそれぞれの役割を分担しわが国の学術情報流通体制を早急に整備しようとするものである。情報システムのあり方は情報の蓄積と伝達であるが、わが国における学術情報の大半を蓄積している大学図書館において、情報量の急増は連絡調整された分担収集へとその蓄積の形態を変更させて来ている。自然科学系外国雑誌収集における拠点館はその典型と言えよう。今後も図書館間相互協力体制の確立と共に図書館の機能が分業化して行くであろう。「学術情報システム」の理念は①学術情報資源の共有②所属機

関や地域を越えたサービス③研究者による研究者のためのシステムであるといわれる。これは情報を必要な人に、必要な内容を、必要な形で、必要な時に、必要な場所で提供することである。

情報の流れは、大量1次情報→2次情報→存在情報→所在情報→原報の提供となり2次情報及び所在情報の段階で検索のためのデータベースが必要となる。この所在情報のデータ及び原報を提供するものとして大学図書館の占める位置は大きい。

大学図書館の機械化について

図書館業務の機械化のポイントとして①情報検索システムによる学術情報流通サービス②図書資料の受入から配架までの時間の短縮—受入では選書、発注時における前処理、目録ではMARCの利用③貸出・返却の能率アップ④雑誌の受入と所在調査⑤蔵書点検等があげられたが、機械化によって効率（どれだけ早く仕事をするか）と効果（どれだけ多くサービスするか）がどれだけ期待できるかが重要である。

おわりに

主な会場となった図書館情報大学は、わが国では唯一の図書館情報学を専門とする大学で図書館情報学という新しい学問領域の教育・研究を行い、大学全体が最新の設備を持った図書館であるということができ公開図書室等興味深いものが多かった。なお、今回の研修では殆んどの受講者が学生寮に入ったため寮生活を通して密接な人間関係の全国ネットワークができた。今後は大いにこれを活用し、今回の研修の成果とあわせて図書館業務に役立てたい。

(教養部分館目録掛長)

医学図書館員セミナー（第8回）

井上久宏

〈とき：昭和56年7月23日(木)～24日(金) ところ：仙台共済会館〉

このセミナーは日本医学図書館協会が主催し参加資格等は、次のとおりである。

1. 日本医学図書館協会加盟館の館員で、3年以上の経験を有する者。
2. セミナーに参加する者は、前もって、予稿集のための原稿を提出しなければならない。
3. 参加者は後日、論文の提出が義務づけられている。

言うまでもなく、このセミナーの目的は、資質の向上と時代に即応した知識を得ることであり、毎年1回行われているものである。

今回は「医学情報とネットワーク」というメインテーマに関連し、「医学情報の収集」「医学情報検索」「文献情報サービス」「相互協力とネットワーク」「未来の医学図書館」の5つの発表テーマであった。セミナーの進行は、各参加者が15分程度の発表を行い、その後、参加者同志で質疑応答を行う形式である。この発表については、あらかじめ、参加者に発表要旨が予稿集として手渡されており、この要旨には必ず参考文献を記載するようになっているため、事前に各々の発表内容をよく研究していたようだ。特に、医学・医療の発展にともない、今後、ますます専門的になっていくであろう情報要求に対処できるよう、医学図書館システムの改善と同時に、館員の職務に対する熱意と努力の必要性をあらためて痛感した。

なお、参加者は28館から28名であった。

(医学分館参考調査掛)

医学図書館員研究集会（第16回）

外園秀夫

〈とき：昭和56年8月19日(木)～21日(金) ところ：順天堂大学有山記念館〉

この研究集会は、日本医学図書館協会主催で毎年1回関東地区と関西地区で3年間単位で行われるものである。最近の3年間は関東地区において「医学図書館とコンピュータ」の統一テーマがきめられ、1回目は文献情報検索、2回目は目録が取り上げられた。今回は最終回として総論的な内容のものおよびハウ

スキージング等を含めて行われた。

今回の研究集会は、欧米等の情報先進国における図書館業務へのコンピュータ利用や図書館ネットワーク等を紹介しながら、文部省が計画した学術情報システムを進めて行く中で、個々の図書館及び館員の対応を模索するということに重点があったように思う。

国内における学術情報システムは、いくつかの拠点図書館を設置して1次情報を網羅的に収集、整備をし、収集、整備された1次情報は相互利用活動を改善、促進し資料の共同利用をはかる。この相互利用活動を効果的に行うために目録情報や所在情報等をデータベース化し、これをオンラインネットワークで結び個々の大学及び研究機関等の調査研究に供しようというもので、個々の大学等においてはその準備として、総合目録を中心とするハウススキージングの電算化や情報検索機能の確立等が求められている。すでに本学においては附属図書館を中心として図書館業務の電算化システムを開発中であることは周知のとおりであり、九州工業大学が56年1月からこのシステムに参加することが決定され本学のシステムも本格化の段階に入っているようである。

このような図書館ネットワークの先進国である米国では、すでにオンライン総合目録に相互協力システムを結びつけ、利用者が必要とする資料を目録で検索した後、貸出しを希望すれば所蔵館がそのままオンラインで貸出しを受けつけるというシステムが開発され実用化しているようである。又、医学図書館の業務のコンピュータ化で注目されるものに米国国立医学図書館(NLM)のMEDLARSⅢ計画がある。これはNLMのコンピュータ化の総仕上げとして目録情報を中心とする図書館業務のオートメ化が目標となっており、図書・雑誌の受入れ及び記録のコントロールから貸出及び相互貸借の自動化システムまでを総合的に結びつけたものだそうである。我が国の学術情報システムもこういった方向に進んで行くと思われるが、最後に、図書館員は、日常業務の基本を再度見直し、組織的な検討を積み重ねながら、急速に変化して行く内外情勢をも把握するよう努力して行くことが要求されている。(医学分館閲覧掛)

図書館等職員著作権実務講習会(昭和56年度)

〈とき：昭和56年8月26日(木)～28日(金) ところ：岡山大学教養部〉

この講習会は毎年文化庁が主催し、図書館その他の施設の職員に対して図書館等の実務に必要な著作権に関する知識を修得させることを目的として行われるものである。

講義内容は著作権法概論(I)～(IV)、著作権条約論、著作権法各論、著作権実務演習(1)～(2)であった。

なお、本学から吉村俊亮(教養部)、安川澄子(農学部)、大藪幸子、原田紀子(以上経済学部)の4名が出席した。

「新しい学術情報システムと大学図書館」(第2回大学図書館研究集会)

〈とき：昭和56年9月16日(木)～17日(木) ところ：国立婦人教育会館〉

標記メインテーマのもとに日本図書館協会大学図書館部会及び国公立大学図書館協力委員会が共催し、全国113の国公立大学図書館から200名を越える館員が参加した。

基調講演「学術情報システムと大学図書館」(東工大・市川教授)・「大学図書館は学術システムの中でどうかかわるか」(文部省・田中専門員)のあと第1～6分科会(レファレンス、相互利用、取書、目録、情報管理、経営管理)にわかれ、2日間にわたって熱心な討議が行われた。

遠藤館長(横浜国立大)の開会の挨拶の中で「学術情報システムのネットワークもさることながら、人的ネットワークの形成も大切である」と本研究集会の主旨を述べられたが、懇親会や分科会対抗バレーボール大会等も催され、終始なごやかな雰囲気の中で研究集会が行われたことは、今後の協力関係の進展に一層の効果があるものと思われる。

本学からは長整理課長補佐が参加した。

◆ 会 議

九州地区国立大学図書館実務者連絡会議（昭和56年度）

〈とき：昭和56年9月3日(木)～4日(金) ところ：熊本大学〉

議題は ①雑誌の取扱について：重複雑誌・外国雑誌の集中管理・長期保存 ②所在不明図書について：亡失弁償・不明図書対策 ③雑誌製本単価の積算方法 ④図書館業務の省力化であった。各大学の実情を述べながら、それぞれの問題点を詳細に検討したが総じて、会計検査に対する会計法上からの業務分析に討議が集中した。また、図書館業務省力化のための電算化、ひいては、北部九州地区ネットワークへの注目、九州大学のリージョナルセンターとしての期待には大きなものを感じられた。

本学からは下川雑誌掛長と落石閲覧掛長が出席した。

国立七大学附属図書館協議会（第55次）

〈とき：昭和56年9月30日(休) ところ：東北大学〉

国立七大学から図書館長が参加して開催され、次の協議題について討議された。

1. 学術情報ネットワーク、特に図書館情報処理ネットワークの具現化において七大学の果すべき役割について
2. 学術情報センター・システムと国立七大学附属図書館協議会の在り方について
3. 学術情報センター・システムにおける地域サブセンターとしての対応について
4. 学術情報センター・システムに示された地域センター館の役割について
5. 「学術情報システム」に対応する学内体制の具体策について
6. 国立大学図書館間相互利用（館内閲覧）制度に対する各大学の対応措置について
7. 大規模大学における図書館資料の共同利用について
8. 大規模大学における附属図書館の概念の明確化 — 機構の整備について —
9. 中央図書館のいわゆる「保存図書館機能」の改善について
10. 職員の研修について
11. 各大学に所蔵される「文庫」「集書」等の整理・目録の刊行について
12. 外国から送付の学位論文の整理と利用について、及び今後の対策について

国立七大学附属図書館事務部課長会議（第14回）

〈とき：昭和56年9月29日(火) ところ：東北大学〉

国立七大学から事務部長及び課長が参加し、次の協議題について討議した。

1. 第5次定員削減にともなう学内の対応について
2. 事務組織の整備について
3. 人事問題について
4. 各大学に所蔵される「文庫」「集書」等の整理・目録の刊行について
5. 掲載出版、翻刻、覆刻出版許可の取扱いについて
6. 所蔵図書の影印、翻刻、覆刻等による出版許可を与える際の経理上の処理方法について

お 知 ら せ

中央図書館のオリエンテーション

教養部から箱崎地区の各学部へ進学した学生を対象に、中央図書館の利用についてスライドによるオリエンテーションを10月28日(水)から11月7日(土)まで行います。館内の掲示等に留意し、積極的に参加くださるよう案内します。

(閲覧課閲覧掛)

中央図書館所蔵の資料を展示

中央図書館では、貴重図書等の展覧を行っています。春夏の各休業期間等を利用して、一般書の中から、めづらしい資料を選んで展示しました。

現在までに、「永見徳太郎編輯：長崎版画集」（正保～慶応年間に長崎で描かれた異国情緒豊かな南蛮文化を中心とした錦絵 昭和55年7月11日～9月10日）「プトレマイオス世界図」（クラウディオス・プトレマイオス（A.D.100～178?）が作った有名な宇宙誌（コスモグラフィア）で、大航海時代への序章とも云うべきもの、ナポリ国立図書館所蔵27葉の複製版 昭和55年12月21日～56年4月7日）および「源氏物語絵巻」（益田家本源氏物語絵巻四葉（夕霧、鈴虫1・2、御法）を中心に近世写本やグラビアをあしらしい、紫式部日記を添えたもの昭和56年7月11日～9月22日）等を展示しました。

来館者からも好評を得ており、蔵書の再認識として利用者や館員にも参考となるので、今後も貴重図書展覧の合間をぬって続けて行く予定です。
(閲覧課閲覧掛)

研究者閲覧室の様相替について

中央図書館2階の研究者閲覧室は、近年の2次資料類の大巾な増加や参考図書の整備に対して書架が不足し、約7,000冊の資料で満杯状態となっていました。このたび、スチール製複式高書架を増設し、約10,000冊の資料が配架できるようになりました。閲覧席数を減らさずに高書架を既設のもの2倍以上に増やしましたが、雑誌架を壁側へ移設した為か室内はむしろ模様替以前より明るく感じられるようです。雑誌の閲覧には多少ご不便をおかけしますが何卒ご了承ください。

又、資料の位置が変わっていますので、わからない時はレファレンスデスクへおたずね下さい。

(閲覧課参考調査掛)

◆ 日 録 (昭和56年7月～9月)

- | | |
|---|---|
| <p>会 議 等</p> <p>7. 9 図書館商議委員会 (第120回)
20～9/24 昭和56年度図書系職員語学研修会 (フランス語)</p> <p>28 図書系掛長会議・同研修会</p> <p>31 図書館体系検討委員会 (第1回)</p> <p>8.31 図書館体系検討委員会 (第2回)</p> <p>9.3～4 昭和56年度九州地区国立大学図書館実務者連絡会 於熊本大学</p> <p>4 医学・生物学系外国雑誌センター館会議 於大</p> | <p>阪大学</p> <p>9.10 図書系掛長会議</p> <p>16～17 第2回大学図書館研究集会 於国立婦人教育会館</p> <p>22 昭和56年度福岡県佐賀県大学図書館協議会第1回福岡地区研究会 於私立共済会館</p> <p>29 第14回国立七大学図書館事務部課長会議 於東北大学</p> <p>30 第55次国立七大学附属図書館協議会 於東北大学</p> |
|---|---|

九州地区国立大学附属図書館親善バレーボール大会(第8回)報告

恒例の夏のソフトボール大会が去る7月26日(日)に鹿児島大学において行われました。

当日は生憎の雨のため急拠会場を鹿大体育館に移し種目もバレーボールに変更されましたが本館は前夜の懇親会に引き続いて大奮闘し、遂に初優勝することができました。第8回目にしてはじめて「九州大学附属図書館」というリボンが優勝カップにつけられ感激もひとしおです。参加館の皆様及びお世話下さった鹿大附属図書館の皆様にごここで厚くお礼を申し上げます。
(整理課庶務掛 白石)

九州大学図書館報「図書館情報」 Vol. 17, No. 3 (通巻123)

1981年9月30日編集 1981年10月25日発行

発行所 九州大学附属図書館・〒810福岡市東区箱崎6丁目10番1号 電話 641-1101 内線 2454